



季節を知ったら  
暮らしが楽しくなった

〔第十九号〕

秋分 九月二十三日



## 伊勢の浜萩

九月長月。夜の空気が日に日に澄んできて、一年で一番月が美しいときです。今年の十五夜は九月二十五日。神宮の森から上る月は、それはそれは格別です。

お月見には白い穂の出た芒をお供えますが、同じイネ科の多年草でよく似た植物に葦があります。水辺に自生し、群生しますが、萱葺屋根を葺いたり、簾を作ったりと、かつては暮らしに欠かせないものでした。

「難波の葦は伊勢の浜萩」。大阪難波の葦が、伊勢では浜萩と呼ばれることから、土地によって物の呼び名や習俗が異なることをいいます。

「伊勢の浜萩」は、二見浦の三津の湊付近に生える葦を呼んでいたようです。五十鈴川を下った朝熊山麓公園のあたりで、かつては葦原が広がっていました。

「神風や伊勢の浜萩折りしきて 旅寝のやすらむ荒き浜辺に」と、「伊勢の浜萩」は『万葉集』にも詠まれています。また、その萩はいつも同じ方向から風を受けるため、片側にしか葉をつけず、「伊勢の片萩」とも言われました。

内宮前の新橋周辺の河原にも、葦原が広がります。その茂みをかき分けると、片葉の浜萩を見つけました。万葉の頃からの風物に、胸躍りました。

風に揺れる浜萩はいかにも弱弱しく見えますが、実は地中に地下茎を張りめぐらせ生育するため、湿地の河川敷を固くするのです。江戸時代の砂丘開拓の際、防風林を作るにはまず浜萩などを植えて、砂や土が少しずつ固まるのを待ってから、次に松の苗木を植えたと聞きました。

記紀の神話には日本の国名として「葦原の瑞穂の国」「葦原の中つ国」が見えるように、葦は日本には欠かせないもの。国土の土台作りにもなった植物なのです。

文 千種清美



伊勢内宮前